

海上の道

永井, 昌文
九州大学

<https://doi.org/10.15017/2230972>

出版情報 : 九州人類学会報. 1, pp.9-9, 1973-10-31. Kyushu Anthropological Association
バージョン :
権利関係 :

海上の道

九州大学 永井昌文

昭和45年11月、第24回人類・民族学連合大会(於 久留米)において特別講演した「弥生時代の貝輪」の内容を骨子として、NHKが製作、昭和47年3月全国向けの教養特集として放映した「海上の道」を再映して後、講演以後の研究の進展について補足的説明を行った。

我国の弥生時代の前期末ごろから急に、埋葬人骨の前腕に装着されて大型の巻貝を縦切加工した腕輪が出土するようになるが、原材となった貝種の大多数が、従来の通説に反し「ゴホウラ」貝であることは、その後の追加例でも動かないところである。

貝輪の出土分布から見て、その流入経路は、南島北限の島々から九州西岸に沿い有明海に入り、北部九州で盛行、さらに一部は瀬戸内沿岸を、他の一部は山陰沿岸を東行したこともほぼ間違いないと思われる。ここに柳田国男氏の「海上の道」なる題名を借用させて頂いた所以もあるのであるが、なお未解決な点がない訳ではない。すなわち、西北九州の長崎・佐賀県下の沿海出土のものは、同じく暖海産の大型巻貝ながら、現在までに知られるところでは、「イモガイ」の縦切のものが多いという事実である。原材の採取地はほぼ同じ島々と思うが、何故に地域的な使用貝種の相違があるのか、もう少し出土例の増加をまって考えてみたい。

なお、NHKの協力によって奄美群島沖永良部島において、ゴホウラの現生が確かめられ、その生態を録画し得たことも大きな収穫であったが、生息水深は意外に深い。この貝の奄美での俗名テルコニャー(テルコ貝)はこの地の海彼岸の他界観とも結びつくと考えられ、弥生時代において西日本の土豪ないしはマジシャンと思われる男性が何故にこの貝輪を装着せねばならなかったか解決の糸口を示唆しているように思う。